

2025年3月2日（大齋節前主日、C年）

牧師メッセージ

「そこにはイエスだけがおられた。」

（ルカによる福音書9:28-36）

司祭ヨセフ太田信三

モーセは律法、エリヤは預言者を代表するとされ、二人で旧約聖書を象徴していると言われます。その二人とイエスが「イエスがエルサレムで遂げようとしておられる最後のことについて」話しをしています。「最後」とは、十字架上の死を意味します。しかし、その「死」は死で終わるものではなく、復活、昇天、聖霊降臨へと続いていく最初の出来事でした。三人が語り合っていた、「エルサレムで遂げる最後」とは、最後であると同時に最初であり、この「最後」において、律法、預言者を通して表された神の愛と救いがまことに実現することになるのです。

モーセとエリヤは雲に包まれて居なくなってしまう、恐れる弟子たちに天からの声が聞こえました。「これはわたしの子、選ばれた者、これに聞け」

ここでの「聞く」というのは、「聞き従う」という意味が含まれています。山上で栄光に包まれた主イエスがこれから歩む先は、十字架への道です。これからペトロたちが聞き従って歩む道は、十字架への道なのです。その歩みを共にすることでこそ、彼らはそこで実現する神の救いの出来事を経験することになります。

いよいよ大齋節です。ことに今年は、今日の福音書後半部分の「なんと不信仰で、ゆがんだ時代なのか。」という言葉がずしりと重たく感じられます。40日間。わたしたちもペトロたちと共に、「これに聞け」と神が言われた、イエスと歩みを共にし、十字架の死と復活の出来事に立ち会おうではありませんか。その旅において、自分自身の不信仰さに気付かされるとしても、その自覚を与えられるからこそ、イエスの死と復活が己のこととして、感じられることでしょう。